

比較文化入門～複眼的な思考のススメ～

徳島大学総合科学部 教授
依岡隆児(比較文学・比較文化)

「なぜ？」という疑問から

比較文化とは、どのような学問なのでしょう。高校の科目にはありませんね。ここでは、先生から与えられた課題をただこなすのではなく、自分が日常生活の中や外国に行った時などに「あれ、おかしいな？なぜ？」と疑問に思ったことを課題にし、掘り下げていきます。比較文化は実は、とても応用的な学問なのです。

たとえば私は、ドイツへ行ってテレビの天気予報を見ていて、違和感を覚えたことがありました。それは、「晴れ」を表す太陽マークの色が黄色だったからです。日本の天気予報では、国旗の日の丸が赤であるためなのか、太陽は赤色ですね。気になって調べてみると、他の国では太陽は黄色で表されたり白色で表されたりと、さまざまでした。私は、文化によって太陽を表現する色は違うことに気づいたのでした。

常識をくつがえす「負のフィードバック」

文化とはそのままではその姿は見えないことが多い。たとえば、部屋の中に太陽の光が入ってきてはじめて、その部屋の中には埃が舞っていることに気づかされます。それと同じで、自文化は外国人に出会ったり、外国に行ったりしたとき、その異文化の光線にさらされて初めて見えてきます。それゆえ、ある文化を研究するとき、異文化との比較が不可欠なのです。比較文化は国際化時代において、このように自文化や異文化について意識するようになったときに、要請されてきた学問であるといえるでしょう。

虹の色が五色だとか六色だとか言う国もあれば、蝸牛もナメクジも同じ単語で表す国もあります。日本人の微笑やお辞儀、会話におけるうなずきが外国人に奇妙に見られることもあります。自分の文化で当たり前だと思っていたことが、外国ではそうでないと知って初めて、その特殊性に気づく。これを「負のフィードバック」と言います。海外に行って異文化を知ること大切ですが、それに劣らず異文化に触れることで自文化の別の側面を知ること重要なのです。

複眼的な思考をしよう！

自文化は異文化によって初めて照らし出されます。だから文化を見るには、複眼的な視点が欠かせないのです。比較文化では、自分と他者、自文化と異文化、過去と現在、ローカルとグローバルというように、対立する項目を両方視野に入れてみる複眼的思考が求められます。

「比較する」とは英語で compare、ドイツ語で vergleichen といいます。どちらも語源に「同じ」(pare と gleich)という語が入っています。つまり欧米では「比較」という行為は「同じ」ということを前提にしているともいえるでしょう。比較文化はただ違いをあげつらう

というだけのものではなく、さまざまに異なるものの間に関連を見出す学際的な学問でもあるのです。

ロシアの民芸品マトリョーシカのルーツは、19世紀末に箱根にやってきたロシア人修道士が土産に持ち帰った、こけしや箱根細工の入れ子人形だという説があります。また、和菓子だと思われる金平糖は、実はポルトガルから伝わった南蛮菓子だったし、アジサイを「紫陽花」と書くのは、中国の詩に出てきた花＝ライラックが日本ではなじみがなかったために、この漢字をアジサイにあてはめたとされています。

比較文化はこのように、関係性に注目し、多角的に見ること、そして文化は「交流」するものとして動的にとらえることを大切にします。これからのグローバル化する世界において、不可欠な見方ではないでしょうか。

本講座では、こうした比較文化の複眼的な思考のあり方を、わかりやすく、できるだけ具体的な事例に則って解説したいと考えています。グローバル化する世界や私たちの日常生活を新鮮な目で見直す一助となれば、幸いです。

総合科学部公開セミナー

第5回：5月26日(金) 18:30～20:00

対象：一般・大学生・高校生 参加費無料

会場：総合科学部1号館北棟3階 301 講義室
事前申込が必要。駐車場の利用可。

詳細：総合科学部 HP

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

申込み・問い合わせ先:

徳島大学総合科学部事務課総務係

TEL:088-656-9779

E-mail: sksounks@tokushima-u.ac.jp

